

< 読者投稿 >

本紙に「OB」なる人物から「鶴ヶ島市庁内の和を乱す者」と題した投書が入った。

鶴ヶ島市職員の頭立つ者達には、若手職員から慕われる先輩職員と、嫌われる者との区別がはっきりしている。下記のOB氏の投書にもあるように、新井順一氏なる上席職員の庁内での悪評に関しては、相当以前より本紙の耳にも入っていた。

藤縄前市長はその辺りを旨く捌いていたが、藤縄市長が引退され、新たな市長が誕生した。齊藤芳久氏である。齊藤氏の前職は、鶴ヶ島市議会の最大会派・新政クラブに所属する3期当選歴のある市議である。藤縄市長引退の後、無投票で鶴ヶ島市長になった齊藤芳久新市長は、生真面目な人物と評されている。

齊藤市長は現在、市政運営の初段階にあるが、生真面目な市長であるから、鶴ヶ島市行政は急速に進歩・向上するであろうと想像するが、期待通りにはいかない。市長を補佐する人選を誤ると行政運営が歪み、やがては市長への信頼度が低下し、見るも無残な結果を招くことになりかねないのだ。

齊藤芳久鶴ヶ島市長の前途を有望たる確かなものにするには、庁内の職員方が喜び勇んで市政発展のために働く方向に導く優秀な人材を選択することこそが、齊藤市長の行政運営の第一歩であり、この第一歩を政治的思惑をもった者の口車に乗り、人選を誤ったならば、齊藤市長には未来はない。その責任の全ては齊藤市長が負わなければならない、その失態に対して、厳しい市民の罵詈雑言を浴びることを覚悟するべきである。いわゆる齊藤芳久鶴ヶ島市長の重要な任務は、「副市長」の人選である。

話はそれるが、かつて品川義雄元鶴ヶ島市長の助役（副市長）に志村実氏という人物がいた。この志村実氏という人物は、現在坂戸グランドホテルに従事し歴代の市長と、その周辺をうろつく人物である。志村氏の活動の真意は、元助役である立場を利用して市行政に立ち入り、政治的助言を以て存在感を高め、市行政を坂戸グランドホテルの最大の顧客とすることを目的とすることだと志村氏をよく知る人物の言である。

志村氏の子分は、鶴ヶ島市行政の重職を務めた内野育雄氏（平成 29 年の 3 月 31 日退職）で、その第一子分が新井順一総合政策部長である。

＜志村→内野→新井＞の路線が確立され、影の親分（志村氏）の指示に基づいた布石が敷かれ、鶴ヶ島市役所を牛耳っているとの情報が本紙に入っている。また志村・柏俣昌実市民生活部長のラインもある。柏俣市民生活部長は、血の気の多い短気な人物として庁内に知られている。しかし藤縄前市長はその実態に気付き、静かにその動きを抑え、市長の職務を全うして退職された。

齊藤市長は、内野育雄氏の同級生でもある。行政運営のスタートラインに立つ齊藤市長は、庁内の部長クラスに気を使いながら市長職の初動期にある。とは云え前述した如く、身近にいる親しく馴れ合った者の助言で、市政を動かすことはあつてはならない。

齊藤市長の行政執行を支える「副市長の人選」を踏み違えると市民の期待は、失望・冷笑・侮蔑に変転することを肝に銘じてほしいのだ。齊藤芳久市長が育った鶴ヶ島市だ。市の発展の為に獅子奮迅の働きを期待して止まない。

本紙としては、下記内容に類した投書は本来受けないが、鶴ヶ島市の現状が副市長の選抜に掛かっている時期だけに、OB氏の投書は鶴ヶ島市庁内の重い空気を描写しており、その内容は本紙の確認している情報と変わらない。だから、エセ情報ではない。OB氏なる人物は、かつての鶴ヶ島市のあり様を杞憂し、同時に、庁内の体制がそのまま変わりなく移行している状態に気を揉んでいるのが、手に取るように判るのだ。ともかく齊藤市長にとっては、大切な時期である故に、僭越ながら御忠告申し上げる意を以て、下記投書を掲載した。

鶴ヶ島市庁内の和を乱す者

かつて鶴ヶ島市役所に内野育雄（平成 29 年 3 月社会福祉協議会退職）という人物がいた。内野育雄は、行政事務に関しては平凡な存在であったが、政治的な動き、嗅覚は相当以上に長けていた。いわば策士と言えよう。ここでは、内野の人物評価は省略する。その内野の第一の子分が現総合政策部長の新井順一である。新井は、東松山市出身で昭和 56 年に、当時の衆議院旧選挙区埼玉二区から出馬していた山口敏夫のコネクションで入庁している。そこで出会ったのが内野育雄（当時都市計画課係長）であった。

入庁してからの新井自身そのものは、口数が少なくもの静かなあまり目立つ存在ではなかったが、平成 18 年に藤縄善朗市政が誕生してから頭角を現してきた。その裏には、内野の存在が大きい。内野の強力な手助けによって出先機関の一本松区画整理事務所長（課長級）から部長に昇格している。新井は、これまでに教育部長・都市整備部長を歴任した後、内野の大きな後押しにより総合政策部長へと大抜擢されている。

しかしながら、新井自身が本当に総合政策部長に適しているのか、実力どおりなのかは、甚だ疑問である。何故ならば、新井自身の庁内での評判は非常に悪い。「好色で、人の好き嫌いが激しく、嫌いな者は徹底的に潰す」との評判で、職員からは嫌われているのが実情だからである。ほとんどの職員（若手職員）が朝の登庁時に新井に挨拶しても、新井が若手職員の挨拶を無視する。

こうした新井の尊大な態度は、庁内の和を乱すのぼせ上った行為である。これでは「**普段挨拶を励行しよう**」と人事課から言われても、肝心要の新井が人事課の庁内融和の履行を根底より覆す僭越な振る舞いでは、庁内の統制は取れない。

市長は新井に対し、嚴重な忠告をしなければならない。また新井は、庁内で目立つ働きをしている職員に対しては、あからさまな手段を弄して潰しにかかる露骨な行為を咎める者はいないのだ。新井の後ろ盾が内野育雄だからだ。極め付けは、現秘書政策課長である宮崎浩代の存在である。（新井と宮崎との関係は知る者ぞ知る）

これについては、平成 28 年に市民課職員による「アンケート改ざん事件」の当時の市民課長の宮崎浩代は、その後、懲戒処分を受けたにも拘わらず、その翌年の人事異動により秘書政策課長へ抜擢された経緯がある。この人事異動を総務部長を飛び越えて裏で操ったのが新井である。

しかし、この人事異動は、鶴ヶ島市職員の誰もが耳を疑ったのである。

通常であれば、処分を受ければ当然次の人事異動では、出先か市民課より格下の課に異動させるのが一般的である。「それが秘書政策課とは…！当市の人事はどうなっているのか」と、怒りと驚きの声が庁内に上がった。

この一件で、ほとんどの鶴ヶ島市職員はやる気を失せたのは周知の事実である。こうした経歴のある新井順一という男を、齊藤鶴ヶ島市長は信頼をおいているのであろうか。この男を更に抜擢するということは、市の正常な運営を誤ることになる。仮に、この新井が当職以上に抜擢されることにでもなれば、職員は益々やる気をなくすであろう。新井の性格は腐っている。職員は皆、新井の今迄の所業は判っているのだ。

「ミノルホド フンゾリカエル アライカナ」

OBより